女性探訪

流れくて支那人の妻となつた美人

(一)

船は今基隆を出て、浪の荒い臺灣海峽へ差懸つた。船客の多くは暗々たる大洋を恐れて、船室から出て來やうとはしない。それを食堂の一隅に座を占めた三四の紳士は、徐に兩切の強い香の煙草に火を點じ、又は濃い茶を啜りながら感に堪へぬもの丶如く、一人の話に聞き惚れて居る。

船は大阪商船の二千噸級の〇〇丸、大洋へ乘出して終へば船長も用はない。K船長は矢張り其の席の聽役の一人であつた。厦門に歸るHドクトル、M會社員、N商店主抔、思ひ思ひに席を取つて、其のHドクトルの話を中心に、華かな……

……又は寂し氣な場面々々の幻想に息を凝らして居る。

船長はじめ血の氣の多い連中許りだつたから、話は實が入つて、時々フーと溜息をつく者さへあつた。

話題は世にも美しい妙齢の少女が、厦門に流れて行つて、支那人の妻として暮して居る事であつた。厦門には内地から連れられて來て、全く支那化した生活を營む女がある。それは或る日本留學生出の支那辯護士（支那では律師と云ふ）の妻で、今は日本人と交際をせず、日本語も忘れた程に變つて終つた。でもその女は人の目に附く程の美人ではない。

Hドクトルの話の中心人物なる者は、美人も美人絶世の美人と云ふのだから話が彈む。以下ドクトルの談である。

(二)

そりや君美人なんだ。何に？、田舍暮して眼が痩せたのだらうつて……？。僕はこれでも油繪の方じや多年苦勞して居るさ。僕の家内だつて……さう〳〵、美人鑑賞家のTさんだつて……まだあるよ。領事館の巡査部長ね。『とても君美しいなア』と溜息をついた位たもの、君達だとフラ〳〵つて來るぜ。ハ、、、、。

小説の樣な話になるが——或る朝の事なんだ。僕は散歩に出て田尾の海を見渡しながら歩いて居ると、どうだ伊達卷のあどけない婦人が、泣き眼らして悄然と歩いて居るじやないか。ハテ見掛けない婦人だと思つて見て居ると、招れ違はうとする瞬間

『もしや日本の御方じや御座いませんか』と聞くんだ。

『さうです』

僕はボカンとして女を見て居ると、泣き出してね……色男だなんて冷かしちやいかん。そこで

『何にか御事情がおありの樣ですが、往來の眞ン中で印度巡査にでも見附かつては都合が惡いでせうから、まあ私の家へ居らつしやい。家内も居ります』

斯う云つて引つ張つて行つたよ。家内も居りますがいゝつて……アハ、、、。それに違ひなし。それで段々容子を聞くとだね。女は神戸の者で、女學校を出て、正金銀行に勤めて居た支那人と同棲して、ツイ四五日前厦門に引揚げて來たのだ。

ところが亭主は自分に嘘八百を云つて、こゝ迄連れては來たが、家にあると云ふ財産なんかはなし、ないと思つた先妻の子供はあるし、第一生活だつて全くの支那人で、とても自分が暮して行ける筈はない。歸るには歸られず、相談相手もないし、失望の極今朝隙をねらつて家出をしたが、捉へられれば拘禁同樣の身になるには定つて居る……とまあ斯うだ。

（三）

それで僕は男氣を出したね。

『宜しい。私は今病院に行かなけりやならないから、家内と遊んで待つて居らつしやい。何にもないが日本食でも上つて……』

女に云つて納得させる一方では、家内に向つて云ひ渡した。

『誰れが來ても渡す事はならんぞ』

然し氣がかりになるので、晝飯時分に歸宅して見ると、驚いたね。その女も居なければ家内も居ない。どうしたんだらうと思つて居ると、間もなく家内が歸つて來てね。女が僕の家へ入るのを、女の家の召使が見屆けたらしいんだ。それで男がやつて來て、無理矢理に引つ張つて行つたんだ。

家内は腕力に訴へても……と爭つたが結局男にはかなはず、仕方がないので、せめて男の後を附けて、其の家でも見屆けやうと行つたのだ。男は

『此の女は少しのぼせて居るんです』抔と云つた相だ。女は『嘘です。嘘を云つてゴマ化すんです』と云つた相だ。

男の家と云ふのは大した家ではなく、成程女は辛抱しかねるだらうと思はれる程だつた相だ。然し男も女も

『いづれ改めて夕方お伺ひします』と僕の家内に云つた相だから、それはいゝキッカケになる。じや夕方此方から出掛けてやらうとね。その夕方早速夫婦で出掛けたんだ。すると男と女は喧嘩の最中だつたらしく、時々ヒステリックの聲を出して、『南京蟲！』と怒鳴るには驚いたよ。男は餘程女に參つて居ると見えて、『南京蟲』と罵倒されても沈默つて居るんだ。

女は、

『此の人と一緒になつて、こしらへて貰つたものは支那服一着なんです。あとは皆私の阿母さんがこしらへて下さつたです』と出して見せた。成程大きな荷物が四五箇あつたが、いづれも立派な着物がギッシリ詰つて居た。

（四）

段々容子を聞くと斯うだ。

親の許しを得て正式に結婚した……結婚の立派な寫眞があつて、一家族揃つて映つて居るが、皆相當の家庭らしい。さうして三年間も同棲して居たと云ふのだ。

ところが男の云ひ分では、此の女はどの位自分に苦勞を掛けたか分らない。自分の出勤中は活動寫眞を見に行くし、少し怒ると幾日も歸つて來ない。此の女の爲に自分の財産はなくなつた。女の親も、どうか此の子を支那へ連れて行つて呉れと頼まれた位で、親も持てあまして居るのだ……と云ふのさ。斯う聞いて見ると男の云ひ分も滿更嘘ではないらしく兩方の話を綜合すると、男は女に參つた。女は不良少女か何にかで始末に負へない。正式結婚も　支那行も、親の望む所だつた。然し支那の男の家なるものが、さも〳〵富豪らしく吹いた點には、女も嘘八百と癪に觸つたと云ふ寸法だらう。よくある手さ。

此の女の話は、これでお終ひじやないぜ。是れからが山さ。焦らすんじやないが、まあ君一ブクさせて呉給へ。

扨てと……その時の女の姿は、下着の薄絹一枚なんだ。妖艶とも何んとも云へない風情で……ハ、、、、。イヤ全く……女房の手前だが見惚れざるを得ないやね。スラリと肉附のい〳〵體で、勿論色が白いし、第一内地から來たてなんで色艶がい〳〵さ。年か？。年を云ふのを忘れたが二十一かだ。とても印象のい〳〵女さ。誰れが見たつて眼につく女だよ。

そこで僕は兩方の云ひ分を聞いて、夕方改めて伺ふ云々の男の言葉を楯に、

『兎に角久振りに日本食を喰べに居らつしやい。その積りで用意してありますから……』と僕は促した。

勿論男の方は氣が進まなかつたらしいが、女の方が氣が進むらしいのを見て取つて、とう〳〵引つ張つて來た。女は上等の着物を着て行くと云ふ時に、トランクの鍵がないと……こゝで女は男に對し、隱したに違ひないと又怒り出したものだ。

結局普常着でもい〳〵とケリが附いて出掛けたが、甲は僕と竝んで話をし、女は僕の家内と肩を竝べて歩いて、少しでも多く女の眞相を聞かうと云ふのがこつちの腹さ。

（五）

さうして僕の家へ行つて、二人を御馳走してさ。K君……音樂家のね。あれにバイオリンを彈かしたり……女が日本曲が聞きたいと云ふから、色々それも聞かしたさ。

ところが女學校時代に習つたか知らないが、多少の心得はあるらしく、音樂ばかりでなしに繪畫にも相當の批評眼があるんだ。まあそんな譯で女は喜んでね、中々歸らうとはせず男の方ではしきりに歸りたがつて……一刻でも女の心を日本人に向けるのは、男に取つては不利だからなア。で僕の方は夫婦して繪葉書が何んだとか、次ぎから次ぎへ取り出しては歡待するんだもの……脂臭い亭主の家よりは遙かに好からうじやないか。

さうして歡待する一方で豫て領事館の方に打合せて、兎に角公然女を保護する必要を生ずるかも知れないつて云ふの

で、R巡査部長を只の友人と見せて、ブラリ遊びに來て貰つたんだ。女は成る可く家内の傍に置くやうにして、イザと云ふ時はどこ〳〵に日本人の家があるからと、チャンと家内に云はせた用心抔は、實に我ながら行屆いたものさ。

さうかうして居る中に夜の十一時頃になつたが、女は歸らうとはしない。それを無理に男が座を立たせて連れて歸つて終つた。異郷でさ。垢の他人夫婦に心から歡待されるんだもの、どんな女だつて感激しようじやないか。それに日本人だもの結局日本人は日本人を戀しがるのは當り前じやないか。自惚れるなつて？……ひどいな。まゝいゝや。

それから其の後氣になるので注意して居ると、時々道で逢ふんだ。女はいつも支那服を着て、女の傍には必ず男が附いて居るんだ。まるで囚人だね。だから勿論親しく口を利く譯に行かずさ。それでも虐待されて泣いて居やしないかと、その家の附近を歩いて見た事もある。領事館の方でも正式結婚をして居るのであるとすれば、無茶に引出して保護を加へると云ふ譯にも行かず、でそのまゝになつて終つた。

（一八）

其の後の事だ。

此の話を知つて居る某君が××を利用して公々然乘込んで行つたものだ。驚いたのは先方で、どうしても逢はせなかつたらしい。色々の質問は間接に答へると云ふので、その事あつて以來全く女の姿を見る事が出來なくなつたじやないか。斯うなると全くブチ壞しで仕方がありやしない。

それから領事館の方では神戸の親元に向つて女の身の上を照會したらしいが、結局親元は承知で支那人の妻にやつたのだから……と云ふので手が附けられない。が然し僕は少し疑問がある。

正式結婚と云つても、男が相當の金を親元に渡したとも思へないし、又女としても嫌やで堪らないなら死ぬ覺悟で逃出す可きだが、それ程極端にも走らないし……尤も男の方は辛らくされゝばされる程戀心が募ると云ふヤツか。それとも女がサドニズム式に男に臨むと、男も女の淫蕩的虐待に快感を覺えて別れ切れないのだらうと……どう思ふ、君達は？

Nドクトルの話は以上で終つた。聽手一同はホーと溜息を吐いた。

M商會主は生理的に淫奔なのだらうと云つた。Nドクトルは勿論だと云つた。親は娘の淫奔に愛想をつかし果てゝ居たから、いゝ幸に支那人に許したのらしいし、女としては相手は支那人に相違ないが、どうしたつて自分から離れず、自分を引摺つて行く力が強いので――引摺られる上の存分なる性的滿足の強さに――ヤケ半分に一緒になつて居るのだらうと云ふのに意見が一致した。

「それにしてもよく變つた風習に從つて、變つた生活が出來るもんだなア」と船長が云へば、

『ナーニ、女つて云ふものは同化し易いさ』。Mは云つた。

○○丸は横に少し動搖しながら西南に進路を執る。明朝は早く厦門に着く筈である。

因に話の中心人物の亭主なる支那人は、姓を洪と云つて年の頃二十七八、女は廣瀬すみ子と云つて年二十一である。（終）